

三一新書 471

アスファルト・ジャングル

五味川純平著



五味川純平

ど み かわ じゆん べい

1916年 満洲に生まれる
東京外語英文科卒業
満洲にて就職，応召
1948年 引揚げ
著 書 『人間の條件』『自由との契約』『孤独の賭け』
『歴史の実験』『戦争と人間』
現住所 東京都渋谷区神宮前1-15-3

アスファルト・ジャングル

定価 260 円

1965 年 4 月 8 日 第1版発行

著 者 © 五味川純平
1965 年

発行者 竹 村 一

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 桂川製本所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電話東京(291)3131~5番

振替東京 84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 471

アスファルト・ジャングル

五味川純平著

宵まで土砂降りだったのが、俄かに冴え渡った夜になった。星がこぼれ落ちて来そうである。いつもは足もとから熱っぽく埃臭い息を吹きかけて来る舗道も、沐浴のあとのようにすがすがしい。それでいて街を歩く人影が疎らなのは、夜どおしの雨と諦めて早仕舞いして、テレビでも見ているのだろう。つまらん番組をだ。その男は、そう思いながら歩いていた。確かに今夜の番組はどのチャンネルもつまらない。この男は、つまるかつまらないかを聴視者に伝えるのを職分の一つと心得ているから、よく知っているつもりである。今夜あたりは、すがすがしい夜道を散歩でもする方が、よほど気がきいている。もつとも、そう思っている当人が、散歩などはめったにしない男なのである。歩くとすれば、いつも、目的地

へまっしぐらに歩く。氣候がよかろうと悪かろうと、いつも何かを追いかけているようである。雨あがりの舗道のすがすがしさを味わったりするような男ではなかった。そのくせ、あまりあくせくしているようには見られなかったのは、たぶんこの男が自分の執念を人には見せないだけの傲慢さを持っているせいだろう。

彼はときどきふり返って空車をさがしたが、路面にさわやかな音を残して走り去る車は、どれもあいていなかった。

かまわない。急ぎはしないのだ。女に会うだけである。女の方はどうせ身勝手な頼みごとを持ち出すだろう。こちらには、正直なところ、女がセクシーな魅力にかけてはなかなかのものだから、頼まれるままに会いに行くところだ。

前方のドブ川から激しい水音がしていた。空が破れたような降り方だったから、よほど水嵩が増しているにちがいない。男がまたふり返ると、白っぽい色の自家用車がなんとも心もとない走り方をして来た。そんな運転をしては車の方が泣きそうな高級車である。白っぽく見えただのは、淡い水色であった。尻の方が飛行機の尾翼のよ

うに張っている。その車が、男を追い抜いて行くと、三十歩ほど先で、急によたよたして停った。ちょうど、ドブ川の橋の上であつた。

ドアがあいたが、直ぐには誰も出て来なかつた。男が近づいて行くと、若い女の顔が出て、ひとりごとを云つた。

「困ったわ」

顔はひっ込んだ。男が車のそばに立ち停ると、中で、女が前へ乗り出して云つていた。

「痛い？ 我慢できない？」

返事がなかつたのは、ハンドルに顔を伏せている運転手が急病らしいのである。

「醍醐さん、運転できない？」

と、若い女は、同乗している中年の男に云つた。

「病院に連れて行かなくちゃ。車も放つとけないわ。タクシー拾つて、どこか病院へ連れてつてよ。あたし、この辺で電話さがして、車の方なんとかするから」

と、また顔を出して、そばに立っている男を見たが、気が気ではないらしく、直ぐにまた顔をひっ込めた。これは、どんなに派手な服装をしても、顔が飛ぶようなこ

とはなさそうな女である。

「だから休みなさいって云つたじゃない」

女は、運転手に、半分だけはいたわりを含んだ文句を云つた。

「やせ我慢するからよ」

運転手が何か云つた。体を起こして、もう一度やせ我慢しようとしたらしかったが、呻いて、また背を曲げてしまった。

「どうしました」

と、外から、男が覗いた。

女には、それが助け舟と見えたようである。

「この辺に自動車屋さんと病院、ありません？」

「探してみないと、どうですか」

「困ったわ」

女の声がいらいらしていた。男が二人もいて何もできないのかと云っているにちがいない。

「醍醐さん、変に落ちついてないで、少しはあわててよ」

「あいにく法律以外には頭が弱いんでね」

と、座席で中年の男がうつすらと笑うと、

「醍醐か」

と、外の男が、運転手のそばへ首を入れた。

「俺だよ」

「やあ！」

と、後ろの座席で「変に落ちついて」いた男が、急病人を忘れたような声を出した。

「牧君か！」

「なんだ、知り合いなの？」

女は忙しく車の内と外を見較べたが、そのときには外の男はもう運転台へ片足を踏み入っていた。

「病人の体をそっちへずらせなさい」

と、いかにも心易そうな命令口調である。

「運転して下さいます？」

女の声がはずんだ。

「おできになる？」

男はニヤリとした。

「車は保険に入ってるでしょうな？」

これが女には心細く聞えたが、車は滑らかに動き出した。

「まず病院だな」

と、牧は誰にともなく呟いた。

「この男はね、お嬢さん」

と、後ろで、弁護士の醍醐が云った。

「TVウィークリーの主幹です。牧君、整形外科の創美医院で知ってるだろ？　こちらは院長野々宮氏のお嬢さんだ」

「……ほう」

と、牧は気のなさそうな声を出したがそのあとが、無遠慮な云い方になった。

「お嬢さんの改築工事ですか」

「まあ！」

と、野々宮蘭子が絶句した。「失礼ね！」とつけ加えたぐらいでは勝負にならないのだ。しっぺ返し言葉を探しているうちに、相手は今度はひとりごとを云った。

「女性は自分の美しさを勘ちがいしてやせんかな。しかし、自然だけがいいってもんでもない……」

「こういう男ですよ、お嬢さん、独身で気楽だもんだから、好きなことを云っている」

と、醍醐が笑った。

「忙しい男が、いまどきこの辺でどうしてたんだね？」

「御婦人に招かれてるんだがね」

牧はぬけぬけと答えた。

「君だけに乗ってたんなら、こんな酔狂な真似はしなかったかもしれない」

そう云ってから、自分にうなずいた。

「いや、ほんとうだ」

2

エデンの女主人下条摩耶は、三面鏡に前を映し、横を映し、丹念に自分の姿を確かめる。着飾って出かけるときには、女が誰でもすることだが、摩耶には、たいいていの女が鏡の中の自分の顔や姿に見惚れる、あの滑稽な甘さはない。これは、この女が、金銭の損得を考えるとと同じくらいに、きびしく、冷やかであった。その顔が鏡に近づいて、ニンマリと笑うのは、化粧や着こなしに満足したのではなくて、これから出かけて行く先での勝利を予想してのことだ。摩耶は、出かけるときには、いつもこうして出かける。予想が覆えされたことはほとんどない。

摩耶は自分がまだ充分に美しいかどうかを、鏡にきく必要は少しもなかった。鏡よりも、男の眼を見ればわかることである。つまり、彼女の魅力が男から無視されたと思ったことは、まだ一度もなかったのだ。もっとも、今夜の相手は、勝手が少しちがうようである。大して金もないくせに、偉そうにしている。摩耶が愛嬌よくしてやっても、ありがたそうな顔もしなければ、摩耶の豊富な肉体を欲しそうな眼つきもしない。同じ女と三べん以上同衾するものではないなどと云いながら、摩耶の方がその気になれば、彼の方も拒みはしないのだ。それがまた、いっしょに飯を食うのと同じ顔をしている。癪に障る男である。たった一つの取柄は、何を頼んでも代償を求めないということだ。たった一つの取柄だが、摩耶のような勘定高い女にとっては、すべてに近いかもしれない。それが、癪に障る男に会いたくなる理由のようである。今夜の摩耶は、鏡に顔を近づけてニンマリと笑ったあとで、直ぐにまたきびしく冷やかに、映っている自分の顔の奥を覗くようにした。

鏡の中で、ドアがあいて、支配人の一ノ瀬が顔だけ入った。

「今夜もお出かけですか」

「モって何よ。悪いの？」

「いいえ。印南先生がおみえになりそうですからね」

摩耶の顔は鏡の中でちょっと考えた。印南十四郎は政界のボスのたぐいである。自分では大ボスのつもりらしいが、摩耶の評価では中どころである。

「よろしく云つといて」

と、摩耶は鏡へ云った。

「今夜は急用ができて出かけましたって」

一ノ瀬は幽かに笑った。そんなことを印南十四郎に取次いだら、女の急用てのは小便に駆け込むぐらいのことしかないぞと笑いそうだからである。

「何がおかしいの？」

と、摩耶ははじめてふり向いた。

「いいえ。印南先生が今夜あたり地所の話を持っておいでになりそうな気がするものですから」

摩耶は現在一流のキャバレーを経営しているが、それに数倍する大サロンの建設を夢みている。一ノ瀬がいま「地所」と云ったのは、その敷地として狙っている繁華街の一角のことである。印南はその肝煎り役だ。けれど

も、彼は、今夜会う男のように無償では働かない。体を欲しがらる上に、リベートまで要求するのだ。

「……河馬さん、欲が深いから……」

摩耶は鏡の中で急にニヤニヤした。印南十四郎を河馬と名づけたのは牧耕平である。印南十四郎にはヒポポタマスの風格があると云ったのだ。摩耶はおかしさをこらえて、ある人がそう云って感心していたと印南に伝えたところが、白負心の旺盛な印南は「おおそうか」とまんざらでもなさそうな顔をした。彼の稀薄な歴史的知識では、語尾にマスとかタスのつく偉人傑物がギリシャかローマ時代に沢山いたように思っているにちがいない。なんぞ知らん、ヒポポタマスは上野の檻の中に現存するのである。印南十四郎が百科辞典の頁をめくって探し当てたときの顔は、想像に絶するだろう。

「けしからんぞ！ 誰だ、そんなことを云った奴は！」

「まあ！ そうでしたの！」

摩耶はとぼければいい。

「あたし、ローマの政治家だとばかり思ってたわ！」

摩耶は鏡の中で笑いを消した。気が変わったのだ。

「来たら、つくし」でお待ちしてますって云ってちょう

だい」

一晚に一カ所で二つの用がたせるかもしれない。牧耕平にはどうしても一肌脱がせなければならぬ。彼が紹介した男のおかげで、摩耶は株式に投じた金をそっくり失いそうなのである。

「いいこと？」

摩耶はハンドバッグの中を改めて、留金をパチンと鳴らした。

「署の人が遊びに来るかもしれないから、ぬかっちゃ駄目よ」

「かしこまりました」

一ノ瀬はドアの外に消えた。摩耶はもう一度、鏡に前を映し、横を映した。

3

ドブ川は荒い音を立てて走っていた。あれだけ降ったあとだから、いろんな物が流れ込んだにちがいない。あしたは屋敷廻りをするよりも、あの橋の下あたりで水に入って、屑鉄でも拾った方がいいかもしれない。徳次は

そう考えた。今日は半日雨に祟られて商売にはならなかったが、まる損だったというのでもない。考えようでは、楽をして、うまいものを食わせてもらって、日当を少しもらったから、ついていたと云えなくもない。気がかりなのは、風邪をこじらせて寝ている娘のことだけであった。

とにかく、その日は、徳次にとっては変な一日だったのだ。雨で商売にならないから、娘のぎんが寝ているガード下のあばら屋へ帰ろうと思って、軒先から軒先へ雨宿りしながら渡り歩いて、最後にそこへ行ったのは、天氣のいい日ならまだ陽が高いところにある時分であった。そこは何をする家だったろう？　たいていのものは見ている徳次にも、見当がつかなかった。元は自転車屋か何かだったのではないか。板塀の内側に空地があつて、土間の広い古びた家であつた。そこに、壊れた自転車やボルトやナットが乱雑に積まれていた。土間の奥の六帖ぐらいの部屋は、畳が荒れ放題に荒れていた。そこで、四人の若い男が麻雀をやっていたのである。もう一人、役者にしたいような若いのが窓に腰かけていたが、これは、よく見ているうちにだんだん蛇のような冷たさを感じ

じさせる男であつた。

「すみませんが……」

と、徳次が軒先から愛想笑いをして、雨宿りの許しを乞うと、麻雀をしていた一人が、

「おう、おんなじこつた、中まで入んな」

と、気さくに云つた。

「おっさん、いつもあの橋んとこでボロを整理してるおっさんだろ、ずっと向うでよ」

窓ぎわの男は暫く黙つて徳次を見ていたが、

「雨じゃ、商売にならねえな」

と、ひとりごとのように云つた。

「全くで」

徳次が相槌を打つと、先方は上り框まで立つて来て、「日当やるから、土間のガラクタを区分けして片づけてくれ」

徳次は拒みはしなかった。日当をもらえるかどうかは疑わしかったが、男の妙な冴えた眼つきが怖かったのである。

「おめえ、家族は？」

と、麻雀の方から、別の若いのがきいた。

「へえ、娘が一人で」

「幾つだ？」

「十五になるところで……」

「じゃア、もう使えるな」

と、麻雀の四人が笑つた。別の一人は冷たい顔をして、何か考えているようであつた。この男は兄貴株らしくつた。その証拠に、他の四人はへらず口を叩き合つていたが、その男に対しては口に氣をつけていることが徳次にも見てとれたのだ。

その兄貴株のが、徳次を煙草を買いにやり、また暫くすると、うなぎ井を五つ注文にやらせた。井が来たときには、もう暗くなりかけていた。雨は一向にやみそうもなかった。麻雀組はガツガツ食いはじめたが、男前のは一箸つけただけで、徳次の方へ突き出して寄越した。間もなく、その男はレインコートを着て、土間に下りると、徳次に三百円の日当を握らせた。

「全部片づけたら帰っていいぞ。二、三ちしたらまた来てみる。積出した残りの屑はおめえにくれてやる」

そう云い捨ててその男が出て行こうとすると、麻雀組の一人が云つた。

「一人でいいですか？」

答えは、徳次に、その男がよほど偉いにちがいないと思わせたものだ。

「お前は云われたことだけすりゃいいんだ」

徳次にはさっぱりわけがわからなかったが、ともかく、日当はもらったし、うなぎ井は御馳走になったし、悪くはなかった。

出て行った男はそれきり戻らなかった。麻雀組はいつまでもやっていた。徳次は、雨があがると、すっかり土間を片づけて、礼を云ってそこを出た。墨汁の雨が降りでもしたように、暗い夜になっていた。

ぎんが待ちわびているだろう。うなぎ井は、食わずに、もらって帰ればよかったと後悔した。徳次も、しかし、腹がへっていたのだ。ぎんには、埋合せに、もらった金で何かを買って行ってやるつもりであった。

ドブ川では水嵩が増えていた。橋まで来たとき、徳次は、日中の暑い盛りに彼がよく昼寝をする橋の下の平らかな土の部分が、水の勢いで崩れはしなかったかと気になった。そこは、徳次がみつけ、ずっと以前から徳次の領域に属する場所なのである。彼は濡れて足もとの危い土

堤を用心しながら下りて行った。多少でも薄明りが残っていれば、彼はそうする前に自分がどういう状態に陥ちかけているかに気づいたはずである。あいにくまっ暗であつたし、彼の頭の中も決して明るくはなかったのだ。

徳次は、彼の唯一の避暑地に、誰かが寝ているのを見た。男らしかった。俯伏せになっているらしかった。触ってみるまでそれが死人だと気がつかなかったのは、こんなところに来て死ぬこともあり得る人間は自分以外にはないはずだからである。一度だけ、徳次は奇声を発した。人が死んでる！ おまわりに報らせよう。確かに、彼は腰を浮かして、そう思った。それから、彼の暗い頭は急廻転をはじめた。報らせれば、まず疑われるのは彼である。彼はしがたない屑拾いだ。誰が信用するものか。彼自身が自分を信用しはしない。かっぱらいだって、する機会があれば、しないとは限らないと自分で思っている。なまじ警官に報らせたりしないで、このまま行ってしまう方がいい。そう思ったときに、運悪く、幽かに光ったものが眼に留った。死人の腕時計である。徳次の心は慄えていたが、徳次の手には図太い知恵が行き渡っていたようであつた。腕時計が死人の手首から離れるまで

には、ものの五秒と経ちはしなかった。突然、車の音がして、頭の上で停った。話し声がした。徳次は、とっさに、逃げ場を水の中に求めようと決心した。水嵩は増えているし、暗いから、姿を隠すには充分である。川幅はせいぜい四間かそこらだ。溺れる気づかいはない。用心して向う岸へ渡ればいい。そう決心してから、度胸が据ったようである。彼はそろそろと匍い出て、橋の袂を透かし見た。白っぽい車がそこにあつて、男と女の声が何やら云っていた。やがて、その車は静かに走り去った。徳次はもうすっかり場慣れしてしまった。彼は、このことはぎんには内証だと、何べんも自分に誓った。黙って、ぎんが喜ぶようなことをしてやりたい。彼は嬉しくさえなりはじめていた。今日はおかしな日だ。変なことばかりある。だが、まんざら悪い日でもなかったらしい。ついでのことに、そう、ついでのことにだ。徳次は死人のずぶ濡れのレインコートやズボンをさぐった。ズボンのかくしから、幾つかの硬貨と、濡れてくしゃくしゃになった紙幣らしいものが出た。このときになって、徳次は、死体がいつも自分が来る場所で発見されては工合が悪いということに気づいた。こうなれば、ついでをもう一つ

重ねるまでである。彼は自分が何を呟いたかは憶えていない。

死人の体は徳次の手で静かに反転され、もう一つ反転して、ドブリと水の中に落ちた。直ぐに見えなくなった。徳次は舗道に匍い上って、橋を渡った。何事もなかったように星が綺麗に瞬いていた。少し行くと、パトロールが来た。徳次は平気で行きすぎるつもりだったが、脚が云うことをきかなかった。懷中電灯の光が来た。それはまっ直ぐに来了。腕時計も濡れた紙幣も捨てて間がなかった。

「何処へ行くんかね？」

と、パトロールが云った。

徳次は舌が纏れて何も云えなかった。

4

急病の運転手と弁護士の醍醐を病院で下ろしてから、牧が野々宮蘭子の云うままに車を運転して行くと、片側が崖になった切り通しの道に出た。崖の上はこんもりとした森である。

「この上ですわ」

と、蘭子が云った。

「お化け屋敷って人が云ってるらしいんです」

切り通しの道を廻って行くと、それが次第に下って街の方へ行くところで、舗装されていない別の道が森の方へ上り坂になっている。曲りくねっただらだら坂である。その行き止りに、垂れかぶさった樹の枝の下に、古びた門が閉っていた。ライトを消すと、他には灯影一つ洩れていない、全くの闇である。

「これですか」

牧はクラクションを鳴らしてから、耳を澄ました。闇全体に虫の音が湧いている。

「なるほどお化け屋敷だ」

蘭子は下りて行って、呼鈴を押すかどうかしたのだろう。車に戻って来ると、

「これからあたしもTVウィークリーの愛読者になりそうですわ」

と、牧が肘を乗せている車の窓に手をかけた。

「いままでは、どうせテレビ番組の紹介だけだろうと思つて、ろくに読んでもみませんでしたの。認識不足ね」

牧の方では、蘭子が云うのをろくに聞いてはいなかった。一向に門があかないのは、家までよほど遠いらしいのだが、ことさらにこう不便にしてあるのは何故だろう、と、いぶかっていたのである。

「あなたのような方がお出しになってるのなら」と、蘭子が続けた。

「きつと面白いにちがいありませんわ」

「……大した地所だが」

と、牧は苦笑して、まるで別のことを云った。

「この不便さは、御趣味ですか？」

蘭子は声を立てて笑った。そこだけ少し明るくなったような気のする笑い声である。

「父の趣味ですの。あんまり人に来てもらいたがらないんですわ」

「千客万来の病院の院長が？」

「ええ。あたしはこんなところ早く出たいんだけど」

「親がかりだから出られない……?」

「脛かじりじゃありませんわ。これでも、化粧品会社の社長です」

「ほう」

牧は笑って、蘭子の方へ鼻ヅラを持って行った。

「この匂いすな？」

門があいた。女が一人、車のそばの蘭子にいていねいにおじぎをしたのが見えた。

「ちょっと寄っていらっして。もう少しお話をうかがいたいわ」

と、蘭子が甘えるように云ったのには答えずに、牧は静かに車を門の中へ入れた。そのときにはじめて気づいたことだが、ヘッドライトの光の中に、仔牛ほどもありそうな巨大な犬が何頭ものそのそと動き廻っているのがある。車のドアをあけようとすると、直ぐ下から獰猛な唸り声がして、新参者を手荒く歓迎しようとしているらしかった。

「たいへんな御趣味だ」

と、牧は車の中から云った。

「来られちゃ困るのは泥棒ですか、税務署ですか」

牧はへらず口を叩いたまでだったが、蘭子にはぎくりと来たようである。直ぐにそれがさっきのような明るい笑い声に変わった。

「ズケズケおっしゃる面白い方」

何かあるな。牧はそう感じたが、何があるにしたところで、牧の知ったことではない。

「お嬢さん、ハイヤーを呼んで頂きましょうか」

「お帰りになります？」

「そうしましょう。今度お目にかかるときは、商談で」

「車を呼んでさし上げて」

と、蘭子が女中の方へ直ぐに云った。重ねて引き止めてもこの男は応じないと見たのだろう。牧にはこう云った。

「あしたかあさって、父の病院の方へいらっして頂けません？ お電話しますわ」

「造顔工事の見学ですか？」

「父に話して広告を出させますわ」

「なるほど」

牧は笑った。

「それはまだ考えてみなかった。いい思いつきかもしれないね。しかし、高いですよ、僕のは」

「高くお取りになったらよろしいわ」

と、蘭子は甘い匂いのする顔を近々と寄せた。

「テレビ広告はその場で消えてしまうけど、牧さんの

一週間テレビのそばにあるわけですものね。うんと父に焚きつけてやりますわ」

「それはどうも」

牧は白い歯を見せた。

「そう願いますか」

「その代り」

と、蘭子はますます顔を近づけた。

「あたしのジュネスをお願いするときには、お安くね。

この匂い、お嫌い？」

牧は無遠慮に鼻を寄せて嗅いだ。

「何処かできいたことのある匂いだな、これは」

5

牧が摩耶の待っている料亭つくしへ行ったのは、街の灯がそろそろ消えかける時分であった。

つくしは、外見はちょっと小意気なしもたやとしか見えないう造りだが、奥の方へのひろがりや、よほどの乱痴気騒ぎがあっても物音をめったに表通りへ洩らすようなことはない。ここは、摩耶が「おばさん」と呼んでいる

初老の女が経営者になっているが、客の常連は、摩耶に悩殺された哀れな男が土地ぐるみせびり取られたにちがいないと思っている。というのは、摩耶が現在この他にも幾つか持っている店は、たいていどの男かが傷を負ったしるしだからである。けれども、つくしに関しては、真相に近いところを知っているのは、牧ぐらいのものかもしれない。

摩耶は、つくしの土地と建物を、ある地方都市の、高德と財産で有名なある寺の住職からゆすり取ったのだ。可哀相な「おばさん」のためにしてやったというのだが、住職はおかげですっかり左前になってしまった。牧はそこ、新聞記者仲間で変人扱いされていたものだが、摩耶という珍しい名が摩耶山にちなんでつけられたものにちがいないという勘から、住職の過去の醜聞を洗いにかかったことがある。その結果、「おばさん」は摩耶の母親らしいと突きとめたが、摩耶は「おばさん」をだにして、本家の父親を裸にしてしまったのだ。日蔭で育った女の復讐心というよりも、摩耶のこれは人並はずれた凄まじい物欲の所為である。牧はほとほと感嘆して記事にするのをやめてしまった。彼にとっては、醜聞をあ

ばいて腕前を誇るよりも、若い女のどぎつい生命力を野放しにしておく方がよほど面白かったのだ。

摩耶は、しかし、そのときの牧の態度を大いに多し
たらしい。金が大してありもしない男などは、摩耶にと
っては何の意味もない動物にすぎないのだが、牧だけは、
それ以来、どうやら唯一の例外たり得ているようである。
牧が通された小部屋で待っていると、摩耶は藍の匂う
仕立卸ろしをきりっと着こなして現われて、まるい膝を
牧に突きつけるようにして坐った。

「何処で道草食ってたの？」

「美人に途中で会ったもんだからね」

牧は摩耶の匂いを嗅いだ。

「ジュネスって化粧品、あるかい？」

「あるわ。大して広告もしてないけど。エデンの子で、

使ってるのがいるわ」

それだな、と牧はうなずいた。

「ははあ、わかった！」

と、摩耶は大袈裟に手を打った。

「そのセールスに何処かへ啞え込まれてたのね」

「そこまでほんのもう一押しだった」

と、牧はけろりとして受けた。

「頼みって、何だね？」

「そうだわ。今夜は牧さんにはよっぽどのこと頼んでも
いいんだわ。あなたにとっては聞き捨てならないニュー
スがあるんだから」

と、摩耶は、腰の線をまざまざと見せるように姿を崩
して呼鈴を押してから、牧の顔を面白そうに見守った。
「聞きたくない？」

「あんまりね。おつりの方がでかいと困る。それより、
何か食わせてもらいたいな」

「いま来ますよ」

ちやうどそこへ女が来ると、摩耶は、

「何になさる？」

「君の奢りか？」

「そうよ。呼んだんだから、奢るわ」

「じゃ、とっときの奴をどんどん持って来てもらおう」

女は笑いを残して行った。

「ヒポポタマスが来てるわよ」

と、摩耶の声が低くなつたのは、まだいる証拠である。

「誰と？」